

My Swimming Life

— マイスイミングライフ —

文/佐藤園江 (本誌編集部)
写真/本多ジェロ

肩

書きはダンス教師でありコレオグラファー(振付師)。

その長谷川さんが、バレエをふたたび生業にしようと思ったとき、「自分の身体を調律するために」習おうと決めたのが、水泳だった。

「理由は明確です。両方とも全身運動で、体幹が使えて、フォームの追求と機能美があるから」

唯一違うのは、バレエには自重を支えるものがないことだ。

「水は嘘をつかせてくれません。言い換えれば、僕の身体を正直者にしてくれるんです」

水と戯れ、水に助けられて、身体がフワッとあがる瞬間「水が自分を押しつけてくれている」と感じる。

そんな彼のバレエレッスンを体験して浮かんだ言葉は「癒し人」だ。

「僕の指導はフリフリ、ヒラヒラという皆さんがバレエに対して抱くものとはちよつと違うでしょう」

そう話す長谷川さん、今でいう「引きこもり」の少年時代を長崎で経験。

つらい精神状態から息子を解放させるため、両親は渡米を承せざるを得なかった。

映画と演劇の道を目指し米国に渡った16歳の彼に、芸術監督が言った。

「君はダンスが向いているよ」

ジャズ、モダン、クラシック、あらゆるダンスをものにするのに半年とかからなかった。「ダンスは、全身全霊を踊りにかたむけ、完璧なまでにダンスと相思相愛だった」

「何でも踊れた僕が自分の踊りに疑問を感じたのが、技術も身体的にも絶好調だった28歳のときでした」

もうこれからは屍のように残された人生を過ごすしかない——絶望感でいっぱいになった。それから15年、ダンスに背を向けた年月を過ごす。

しかし、復縁のチャンスが突然やってきた。きっかけは夕食に招いた友人の恋人のひと言だった。

「私、バレエを習い始めたばかりなんですけど、教えてくれませんか」

2度指導をした。2度目の帰り際

彼女は笑顔で茶封筒を差し出した。

「えっ、これ何？」

「レッスン料。ずっと教えてほしいから」

青春のすべてをついやしたダンスで誰かを幸せにできるのなら、これが僕の使命なのか。こうして自分が踊るのではなく、人を踊らせるダンスとの新たな付き合いが始まった。

長谷川さんのもとへは、ダンスを習いたい人だけでなく、心の痛みに悩む人も訪れる。幼いころ自分の手のひらから発せられる正体不明の子カラにとまどっていた長谷川さんは、今、その気功も併せながら、ダンスをとおして、来訪者の心と身体をじんわりと解放していく。

シンクロナイズド選手、空手家、トライアスリート、もちろんスイマーもくる。「競技者へは、コアとインナーマッスルの使い方の指導が多いですね」

水泳とバレエはとても相性がいいという長谷川さん。そしてバレエを高めてくれる水泳が、今「楽しくて楽しくて」しょうがないという。

水で身体を調律する癒しのコレオグラファー

長谷川直志さん (ダンサー/46歳)

はせがわ・ただし 1982年、長崎県出身。16歳で舞臺舞。ロサンゼルスのパフォーミング・アート・スクールでバレエ、ジャズ、モダン、タップダンス、ポントマイム、演劇、音楽を学び、バレエとコンテンポラリー・ダンスのダンサー、コレオグラファー(振付師)として13年間活動。1991年、現役引退を機に帰国。その後15年間「普通の生活」に挑戦するも、身体が嘘をつき続けることを認め、ダンスと復縁。CoolBallet(クールバレエ)を立ち上げ、自らも例としてバレエとの新しい付き合い始める。水泳との出会いは2006年9月から。自身のダンスと最も相性のよいスポーツとして、現在はレースへの参加も視野に入れレッスンを勤む日々。
<http://www.coolballet.com/>

